

家乗別記

三

✂
k 43

家乗別記

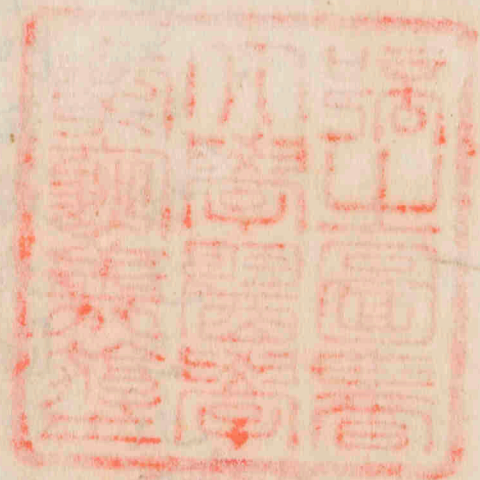
F³
カ-45

490.28

K

No. 2512

12 K 43



187

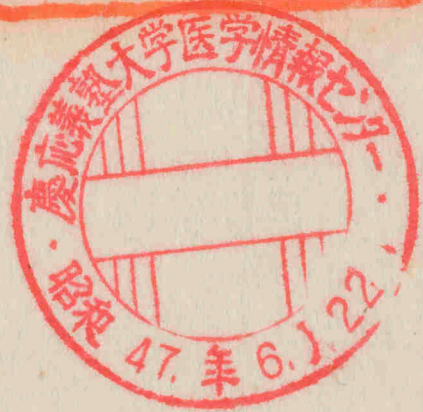
富士川家藏本

家乘別記卷三

顯晦紀

高九

藤崎系圖、八、金光之比、為羽州鎮狄將軍、ト、イ、ロ、田
畑喜左衛門所藏系圖、八、高九改家麻呂、ト、イ、一、リ、
金光、八、擬年號、三、元、法興、ノ、類、十、リ、春秋曆略、三、云、欽
明帝云、知僧六年庚寅、改元金光、至二年辛卯、赦遠
帝元年壬辰、至四年乙未、用金光、ト、イ、ロ、年家、ト、イ、ロ、



富士川文庫
267

善光寺炎燒ノ條ニカノ如來ハ百濟ノセイノ王
我朝ノ帝欽明天皇ノ御宇ニ及ヒテカノ國ヨリ此
國一ウツラセ玉ヒテ振津國難波浦ニシテ星霜ヲ
オクラセオハシマス常ニ金色ノ光ヲ放タセ玉フ
是ニヨツテ年號ヲハ金光ト號スト云リ鎮狄將軍
ノ下ハ西土ノ冊命ナリヤ別ニ所見ナシ藩翰譜ニ
高九ノ名ナキハ疑フ闕レナラン又田畑系圖ニ高
九改家麻呂トアルモ心得ヌナリ續日本紀ニ鎮
狄將軍安倍家麻呂ト云人アリ是等ニ思ヒヨセテ

イツクノサカレテ人カカル事ヲモ書入レニテ
ハナキカト思ハルハ幡愚童訓ニモ同名アリ
仲哀帝ノ時ノ人ナリ

安竟

藤崎系圖ニ云天平寶字之比惠美大臣仲九遣价使
於奥州偽云我本為汝同姓我欲辭帝都去行汝國不
知許否安竟不信之便誅殺价使後經數年建敵開帝
大御感贈賞寶龜之比人也為世猛將故稱云忠將ト
アルモ信ラレズ

國東

藩翰譜云第六十六代一条院御時蝦夷又
レニ致東カ後國東軍兵ヲ率升テ夷ノ地ニ渡
リ上道下道ニ手ニ分レテ攻入終ニ其首領三四
人ヲ虜ニシテ歸リ自ラハ薯蕷ヲクテヒカレニハ鹿
角ヲアタヘ彼ニハ黒ト石ヲアタヘ我ハ黒豆ヲ食
フ蝦夷トモ大ニ恐テ悉クニ從ヒ又新羅記頭書
本人皇未十六代一條天皇之御宇長保元年安日國
東春内之時任安大夫號東海日下將軍ト云リ龍
院系圖本ニ桓武天皇御宇トアルハ誤ナリ今ハ

新羅記頭書藩翰譜ニ從ヒ

忠頼

諸家ノ譜ニ忠頼ヲ載ザルハ脱レタルナリ藩翰譜
ニ忠頼ノ事合考見エズトアリ義經記ニ安倍
權守ノ世マテハ宣旨院宣ニモ恐レテ毎年上洛シ
テ逆鱗ヲヤスノ奉ルトアルハ忠頼ヲサレテ云ル
ナリサレハ陸奥權守ニ任セラレレ人ナルハ六
郡トハ東鑑ニヨルニ伊澤加賀江刺禊枝志波岩手
ノ六郡ナリ

忠良

諸家ノ譜ニ、賴良ニ作レリ、今ハ陸奥語記鳥海ノ語
ニ從テ、藩翰譜ニハ、賴良ニ作レリ、

賴良

藩翰譜ニ云、賴良カ子、賴良、安東太郎ト名ノリテ、陸
奥出羽兩國ノ押領使トナレリ、國人ハ安部將軍ト
云ヒナリ、義經記ニハ、思荷ヲカノ大夫トナリ、龍德院系圖ニ
ハ、安倍日下將軍トナリ、陸奥語記ニハ、安大夫トナ
リ、思荷ハ夷人ノ名、阿倍引田ナリカ、ヤカテ地名ト
ナリ、賴良カソノ地ニ居住セシカテニ、思荷大夫ト

ハ云ヒナリ、

東鑑ニ云、二品歷覽安倍賴時

本名賴時、義也。

衣河遺跡給郭

土空殘秋草、鏢兮數十所、礎石何在、舊苔埋百餘年、賴

時、掠領國郡之昔、點此所、攝家屋、男子者、并殿、盲日、厨

河次郎、貞任、島海三郎、宗任、境、誦師、官、照、黑澤尻、五郎

正任、白鳥八郎、行任、等也、女子者、有、加一、乃末陪、中、加

一、乃末陪、一加一、乃末陪也、已上八人、男、女子、宅、並、簷、

郎、從、茅、屋、闔、門、而、界、於、白、河、関、為、十、餘、日、行、程、東、據、於

外、瀨、舟、又、十、餘、日、當、其、中、央、開、闔、門、名、曰、衣、関、宛、如、海

系圖藤崎系圖以官照為井殿首目名蓋誤トテ龍
穗院系圖モ日本史ニ同レ今ハコレニ從ヒテ猶舊
說左ニ記ス俗說辨ニ云安東太郎賴良後改名八男
三女一曰井音目二安東太郎良宗三厨川次郎貞任
四鳥海弥三郎宗任五境講師官照六黑川尻五郎正
任七重任八白鳥八郎行任止鳥海杉亭系圖ニ云一
井殿二良宗安東太郎三貞任厨川次郎大夫四宗任
鳥海三郎五正任黑澤尻四郎六家任磐井五郎七重
任北浦六郎八則任也與鳥七郎トアリ塩尻ニ安東氏譜ヲ引ル

是ト俗說辨ニ官照ヲ官照ニ作ルハ誤ナリ東鑑
同レハ官ニ作レリマタ義經記ニ云昔兩國ノ大將軍
ヲハ恩荷大夫トゾ申ケル彼ガ一人ノ子アリ嫡子
粟屋川次郎貞任二男鳥海三郎宗任家任モリ任リ
正家譯カ重任トテ六人ノ末ノ子ニ境ノ冠者良照ト
テ霧ヲオコレ霞ヲタテ歎カコル時ハ水ノ底海ノ
中ニテ日ヲ送りナトスルクモノナリ止良照ヲ
以テ賴時ノ子トセシ誤ハ下ノ良照ニ云ヘシ兄弟六
人ト思ヘルモ誤ナリ

今昔物語云今ハ昔陸奥國ニ安倍頼時トイフ兵
有ケリ其國ノ奥ニ夷ト云者アリテ公ニ隨ヒ不奉
シテ戰ヒ可奉ト云リ陸奥守頼義朝臣責ニトレケ
ル程ニ頼時其夷ト同心ノ聞エ有テ頼義朝臣頼時
ヲ責ニトレケレハ頼時カ云ク古ヨリ今ニ至テ
公ノ責蒙ル者其負アリトイフハイマダ公ニ勝奉
ル者一人モナレ然レハ我更ニ錯ツテ無レト思ヘ
レ此責ヲノミ蒙レハ敢テ可遁方無レ然レニ此奥
ノ方ヨリ海ノ北ニ遊ニ被見渡ル地有ナリ其

渡所ノ有様ヲ見テ有ヌハト所ナラハ此ニテ徒
ニ命ヲ亡サレヨリ我ヲ難去思ハシ人ノ限ヲ相具
シテ彼ニ渡リ位ナレト云テ先大ナル船一ツヲ調ヘ
テ其ニ乘テ行ケル人ハ頼時ヲ始テ子ノ厨河二郎
貞任鳥海三郎宗任其外ノ子共亦親ク仕ケル郎等
廿人許也其從者共亦食物ナト為ル者取合セラ五
十人許一ツ船ニ乘テ暫可食白米酒菓子魚鳥ナト皆
多ク入レヤカテ船ヲ出レテ渡ケレハ其被見渡ル
地ニ行着ニケル然レハ遙ニ高ト巖ノ岸ニ上

ハ滋キ山ニテ有ケレハ可登様ニ無リケレハ遠ニ
 山ノ根ニ付テ差廻テ見ケルニ左右遠ナル葦原ニ
 テ有ケル大ナル河ノ湊ヲ見付テ其湊ニ差入ニ
 ケリ人々見エルト見ケレト人々見エカリケリ亦
 登ルヘテ所ヤアルト見ケレト遠ナル葦原ニテ道
 踏タル跡ニナカリケリ河ノ底モヒレ又深ク沼ノ
 様ナル河ニテナレ有ケル若人氣ノスル所ヤアル
 ト河ヲ上様ニ差上ケル程ニ只同様ニテ一日過キ
 テ中過ケルニ奇異ト思ケルニ七日差上リニケリ

只同様ニテ有ケレハナリトイカテ河ノ畢
 無キハ有ニソト云テ十日差上リケリ尚人ノケハ
 ヒミナク同様ナリケレハ廿日差上リニケリ其時
 ニ暁ク地ノ響ク様ニ思エケレハ船ノ人皆何ナレ
 人ノアルニカ有ラレト怖レク思エテ葦原ノ遠ニ
 高キ船ヲ差隠レテ響ノ様ニスル方ヲ葦ノ迫コ
 リ見ケレハ胡國ノ久ク繪ニ書タル姿ニケル者ノ
 様ニ赤ク物ニテ頭ヲ結クル一騎打出テ船ノ人此
 ヲ見テ此ハ何ナル者ソト思テ見ル程ニ其胡ノ人

打次、負之不知出来。ケリ、河ノ際、皆打立、聞
モレレヌ言共ナレハ、何事ヲ云フモ不聞。モレ此船
ヲ見テ云、ヤ有ラレト思ハ、弥隱レテ見ル程ニ
此胡人一時許、嚙合テ、河ニ入テ、打入テ渡ケル
ニ、千騎許ハ有ラレトソ見エケル。歩ナル者共、ハ
馬ニ乗タル者共、引付ケツ、渡ケル。早ウ此者
共ノ馬ノ足音ノ遠ニ響テ聞エケルナリケリ。皆渡
リ畢テ後、船ノ者共此廿日許、差上リツルニ、一
所渡瀬、思レテ所ニテカリツルニ、此ク、歩渡
リシツル

此、ソノ渡瀬也ケレト思テ、恐ク、差出テ、ヤワラ差
寄セテ見ケルニ、其モ底井モ不知、同様深カリケレ
ハ、此モ渡瀬ニハ、アヲサリケリト、奇思ク思テ止
ケリ。早ウ馬ノ後ト云フナレテ、馬ヲ遊シテ渡リケ
ル也ケリソレニ、歩人共、ハ、其馬共、引付ケツ、
渡ケルヲ歩渡ト思ヒケル也ケリ。ナリ、船ノ者共、頼
時ヨリ始テ、云合セラ、カク上ルモ、量モナキ所ニ、
ソ有ケレ、亦サレ程ニ、自ラ事ニ、値ナハ、極テ、益ナ
レ、然レハ、食物ノ盡ヌ前、クサ、逆ナレト云テ、ソレ

日本ニ勝レシ大河
多シ先西蝦夷地
ニシテアリトイフ
河アリ此河蝦夷
地第一ノ大河ナリ
又東蝦夷地ハ
ハカチトイフ河

アリ此河蝦夷
地第二ノ大河ナリ
相シレリ河
夷海ニ乘リテ涼
ノ方ニ游ルル九
九日ニシテ河也
蝦夷工人ノ住居
村ハアリ是蝦夷
地ニ例シタナキ
ナリトイフ本音
ニイハルモ此ワタリ
ノ事ナラシク

ヨリ差下テ海ヲ渡テ本國ニ還リケル其後幾程
モ不經シテ頼時ハ死ニケリ然レハ胡國ト云所ハ
唐ヨリモ遙ニ北ト聞ツル陸奥國ノ奥ニアル夷
ノ地ニ差合クルニヤ有ニト彼頼時カ子ノ宗任法
師トテ筑紫ニアル者ノ語リケルヲ聞繼テカク語
リ傳ヘタルト也宗任拾遺ニモ見タリ○蝦夷國風俗人勝之
觀迹聞老志ニ云衣河館今日高館在牟泉村東阿倍
頼時所築曰之衣河館文治中民部少輔基成居此館
基成自殺于茲今詳考東史或記歷覽頼時遺蹤或記

則兼任于衣河館按義經東行之時秀衡別稱營于衣
河館中稱之高館而往年頼時舊館此時猶存者可
百練抄ニ云ク康平五年九月廿三日諸卿定申陸奥
守頼義言上侍因安倍頼時去七月廿六日合戰之間
中矢死去事遣官使可被實檢實否云

龍穩院系圖ニ云贈號醍醐山大龍寺殿傑山良俊大

禪定門龍穩院ト云ハ秋田山龍穩院トイヒテ女羽

ノリレ時ノ菩提寺ニテ秋田家ノイマダ封ヲ移カレ

會ト思ハルハ此ノ記ニテハ今取ラス此ヨリノ附

ルハ我家ノ世系ノシヲ記
シテ其他ハ悉ク記ナド

下
為元

為元ノ子ヲ家元ト云、岩城判官ト稱リ、岩城志ニ云、
堀河院寛治四年、岩城判官家元、子為元、藤原清衡ト不
合、勤スレハ、矛盾ニ及フ云々

上
良照

義經記ニ云、六人ノ末ノ子ニ、坂冠者良照トテ、霧ヲ
カコシ、霞ヲタテ、款カコル時ハ、水ノソコ海ノ中ニ
カクリナトスルクセモノナリ、是等兄弟、夕

ケル高サカラ人ニモコエタリ、貞任ガタケハ九尺

五寸、宗任ガタケハ八尺五寸、イヅレモ八尺、オト

ルハナシ、中ニモ坂冠者一丈三寸候ケルナリ、貞

任ノ弟ハ坂講師官照ナリ、コニ云ルハ賴良ノ弟

良照ヲサレテ云ルナリ、厨川ノ戦敗レテ後、逃レテ

出羽國ニ至リ、源齊賴ニ生擒レ後、太宰府ニ流サ

ル

觀迹聞老志ニ云、小松館、在衣川村、近瀑布、有古壘址、
永承之役、貞任叔父良照者所守也

貞任

義經記ニ云、アベノ權守ノ世フデハ、宣告院宣ニモ
 オソレテ、毎年上洛セテ、逆鱗ヲヤスメ奉ルアベノ
 權守死去ノ後ハ、宣告ヲソムキタマク院宣ナル時
 ハ、北陸道七ヶ國ノカタ道ヲ賜ハリ上洛仕ルヘキ
 由申サレ候ケレハ、片道賜ハルベキトテ、下サルベ
 カリシヲ公卿僉議アリテ、是天命ヲソムクニコソ
 候ヘ源平ノ大將ヲクダシ、追討セラセ玉ヘト申サ
 レハ、源賴義勅宣ヲ承リテ、十一萬騎ノ軍兵ヲ

率シテアベヲ追討ノタメニ、三ヶ國ヘ下リ玉フ

駿河國ノ住人、高橋大藏大夫ニ先陣ヲサセテ、下野
 國イモウト云所ニツク、貞任是ヲ聞テ、厨川城ヲ去
 テ、アツカレエノ中山ヲラシロヒ、アテ、アタリノ
 郡ニ木戸ヲタテ、エキガタノ原ニ馳向ヒテ、源氏ヲ
 コツ、大藏大夫大將トシテ、五百餘騎、白川、関ヲ打越
 テ、ユキカタノ原ニ馳ツキ、貞任ヲセム、其日ノ軍ニ
 打マケテ、アサカノ沼ヘ引退ク、伊達郡アツカシエ
 ノ中山ニタテ、コモリ、源氏ハ、レノブノ里スルカニ

河ノハタハヤシロト云所ニ陣ヲ取テ七年ヨル
ル戦ヒクラスニ源氏ノ十一萬騎皆ウタレテ叶ハ
ジトヤ思ヒケシ頼義京へ上リテ内裏ニ参リ頼義
叶フフジキ由ヲ申サレケレハ汝叶ハズハ代官ヲ
クダシ急ニ追討セヨト重子ヲ宣旨ヲ下サレケレ
ハ急ニ六条堀川ノ宿所へ歸リ十三ナル子息ヲ
内裏ニ参ラセケリ汝カ名ヲハ何ト云ゾト御尋有
ケルニ辰ノ年ノ辰ノ日ノ辰ノ時ニ生レ候トテ名
トクハシタト申候ト申ケレハ無官ノ者ニカセ

シノ大将サスル例ナレトテ元服セサセヨトテ後
藤内ノリアキヲサレソヘラレテハ幡宮ニテ元
服サセテハ幡太郎義家ト號ス其時御門ヨリ賜ハ
リタルヨロヒヲソクハシタガウブキヌト申ケ
リ秩父ノ十郎シゲクニ先陣ヲ賜ハリテ奥州へ打
下ルアツカレエノ城ヲ攻ケルニ猶モ源氏打マケ
テ事アレカリナレトテ急ニ都へハヤ馬ヲタテ此
由ヲ申ケレハ年號ガアレケレハトテ康平元年ニ
改テレ同年四月サ一日アツカレエノ城ヲ追落ト

本ノ、
 一、カラサルニカ、リテ、イサハ、関フセメ、越テ、モリ
 ミノ郡ニコモル、源氏ツ、イテセノ玉ヒレカハ、才
 カラノ中山ヲ打越テ、センボクカナザハノ城ニ引
 コモリ、ソレニテ一兩年ヲ送リ、ク、カヒツレ、氏鎌
 倉ノ権五郎景政、三浦ノ平大夫夕ノツ、大藏大夫
 光任、是等カ命ヲ捨テセノケル程ニ、カナザハノ城
 ヲモ落サレテ、白キ山ニカ、リテ、衣川ノ城ニコモ
 ル、夕ノツ、カケマサ、重テセメカ、ル、康平三年六
 月、一日、貞任ハ大事ノ午ヲホヒ、ク、午十レ、色バキ

又、フキテ、イハデノ野、ベニソフレニケル、第ノ宗任
 ハ、降々トナル、坂ノ冠者ハ、後藤内生捕ニレテ、ヤ刀
 テキラレヌ、義家都ニ馳上リ、ウチノ見参ニ入テ、未
 代マテノ名ヲアゲ玉フ、止コノ談誤多シトイヘ、氏
 記ニテ、後ノ考ニ備、鎌倉権五郎景政カ、コノ合戦ニ
 後世實ソ、吹ルモノ多シ、申ニ、此書始テ、虚ツ、吹
 ハ、景政ノ子孫、香川景継ト云カ、先祖ノ事蹟ヲレラ
 セ、トテ、著シタル書也、ソノ書、イフ七十代後冷泉
 院御宇、天喜ノ比、安部頼良、同長男貞任、仲子宗任、并
 一門ニ、鳥海、弥三郎、国ヲ乱ル、仍テ、為退治、源頼
 義、義家、奥州ニ下向有レ、景政相、從テ下リ、後三年
 ノ軍ノ時、鳥海、弥三郎ニ、弓手ノ眼カ、矢ヲ射テ、弥三
 郎ヲ討テ、候、此、時、十六歳ニ、テ、候トアリ、後三年ノ

被射トイフ、旨三
 夜其矢ヲ不接、遂
 三春ノ

二十六歳ナル者カ前十二年ノ戦ニ出ヘキ様ナリ
ル、笑フニ堪タルナリ、下リ鳥海強ニ昂カ下ハ、未、出
ス、

東鑑寛正五年三月十七日ノ條ニ云、黄蝶飛幅假令
一許丈、列三段許、凡充滿鎌倉中、是兵革兆也、承平則
常陸下野、天喜亦陸奥出羽、四箇國之間、有其怪、將門
貞任等、及闘戰訖、而今此事出来、猶若可有東國兵亂
興之由、古老之所疑也、

源平盛衰記曰、云、平相國入道宣ニケルハ、冷泉院

御宇、東夷朝家ヲ背レカハ、伊豫守源頼義勅ヲ奉

貞任ヲ攻レニ、頼義カ末子ニ、頼俊ト云ケルモノ

ヨキ、歎其數餘多討テ、毎日ニ退カス、進戦ケル程ニ、

流矢ニ中ラセ、ケリ、頼義朝臣トサメル心ニ惜ミ、

永キ別ヲ悲テ、天ニ仰テ、歎由聞召ケレハ、帝御白筆

ニ、金泥ヲ以テ、尸骸成佛ノ真言ヲアソハシ、此ヲ亡

骨ニ具メ、墓ニ埋ハ、其亡骨必成佛ス一レ、天子ノ御

志、幽靈カ成佛頼義弟カ悦サラント、勅書ヲ遊ハシ、

奥州ニ送下サセ給タリケレハ、父頼義忽ニ別離ノ

歎ヲ止テ、勅命ノ忝キニ、歡喜ノ涙ヲ流レケリ、

古今著聞集ニ云、伊豫守源頼義朝臣、貞任宗任等、引
セムル間、陸奥ニ十二年ノ春秋ヲ送りケリ、鎮守府
ヲタチテ、秋田城ニウツリケルニ、雪フリテ、軍ノ者
トモノ鎧ミナ白妙、成ニケリ、衣川ノ館岸高ク川
アリケレハ、猶ツイタ、キヲ雷ニカワ子、後ツクミ
テ責戦フニ、貞任等エタエズレテ、終ニ城ノウシロ
ヨリノガレ落ケル、一男ハ幡太郎義家、衣川ニ追タ
テセムフセテキタナクモウレロク見スルモノカ
レシ引カヘセ、物ハハントイハレタリケレハ

貞任見カヘリタリケルニ、衣ノタテハ、ホコロヒ
ニケリト云リケリ、貞任クツバミツヤストラヘシコ
ロフフリムケテ、年ヲヘレ糸ノミダレノクルニ
サニト付タリケリ、其時義家ハゲタル箭ヲサレハ
ヅレテ歸リニケリ、サバカリノタ、カヒノ中ニヤ
サレカリケルナカテ、止或人此事ヲ難ビテ、貞任ハ
勅歌ナリ、一和歌ノ故ヲ以テ、コレヲスルスヘカラ
ズコレヲユルストナリハ、良將、アラスト云リサレ
レ、良將ナラズトケイカニセン、後世ヨリ強テ良將

龍穩院系圖云、康平五年十一月廿九日戰死、
 贈號大納山耳納寺殿大雄貞任大禪定門、耳納寺ノ
 談ニ出タリ、云ク、六條坊門北西洞院西ニ有堂、号三
 輪堂、件ノ堂ハ伊豫入道賴義奥州ノ存因討夷ノ後、
 所建立也、佛ハ等身ノ阿弥陀ナリ、賴義造立此佛、奉
 敬禮拜シテ、往生極樂ノ引導レ玉ヘト申ケレハ、
 十ツカセ玉ヒケル、十二年ノ間、戰場死セ、者ノ復
 取ツ切集テ、乾シテ皮籠ニ合ニ入テ、持テ上タリケ
 ルヲ件ノ堂ノ土壇ノ下ニ埋トシ、仍テ秋回家法
 耳納堂ニテナリ、
 號帳ハ、康平五年九月十八日、清白寺殿貞亮義任
 北禅定門トアリ、月日同レカラス、東鑑ニ、康平五年

九月十七日、入道將軍家賴義、於此厨河、獲貞任宗任
 千世牽子等頭給トアルハ、陸奥話記ト合一リ、今コ
 レヲ以テ正既トス、康平記ニハ、十月廿九日、左大弁
 被覽前將軍賴義朝臣、與存因貞任宗任等合戰、由文
 即付藏人弁令奏給トアリ、義經記ニ、康平三年六月
 廿一日トアルハ、云ニタラス、

厨川八幡

圓明院行智カ、八幡神像考ニ云、オヨソ天下ノ神廟
 ノ許多ナルハ、八幡宮ヲ以テ最トス、牛頭天王祠

レニ垂リイテヤ御神徳ノ世ニ勝レウセオハシ
スニアラスレテハ、イカニゾ、カク益国ノ崇敬シ奉
ル事ノアラメヤハ、牛頭天王ノ御社ハシモ、カケマ
クモ惶キ、天孫ノ尊ノ御外祖ノ彥尊ノ御神靈トシ
ニ聞エカセ玉ヘハ、天下ノ人ノ齋キ奉ル下、夕字
信ナリ、中ニ就テ、ハ幡宮ノ大菩薩ノ大御神ハシモ、
天照大御神ニハ、サ一世ノ神統御在世ノ御號應神
天皇ノ聞エサセオハシマシテ、太后ノ御腹ノ内ニ
マシナカラ、韓國ヲコトムケサセ玉ヒケシ

ハ、御代、異域外寇ノ侵ス下アル折ニモ、
マツ御神徳ヲ現ハシテ、寇トモテ退ケ玉ヒ、室祚ヲ
護リ、国土ヲ鎮ノ玉フ神威ノ掲^イ為^シクオハレマセハ
ニヤ、武士ノ家ニハ、弓箭ノ神トサヘ仰キ奉リテ、王
臣萬民ノ崇敬シ奉ル下、アタシ神ニモ超勝レサセ
玉フモノナリサレハ、康平ノムカシ、源鎮守ノコト
ニ信仰マシク、テ、子息義家、朝臣ヲモテ、男山ノ氏子
トモ申仰キ玉ヒシヨリ、ハ幡太昂殿トモ申レ、度、
ノ軍ニモ、御神靈ノマツナル御レルレ、有テ、歌

誅レ萬民ヲ安レジ玉フテト一ニ御神徳ノ故ナリ
リトテ天下ノ國ニ五里ニ一社ノ御宮ヲ建ケセ
玉ヒケルヨリ五里ハ幡尾申テサテコソ此御神祠
ノ世ニハ多クナラセ玉フトソ聞エ侍ル其比ノ五
里トイフハ今ノ一里ヨリモ近ナト聞エレハハ
ユル六町一諸國ノ此御神ノ宮ノ多キヲ以テ思フ
ヘレカクテハ幡ノ御神像ノ世ニカガマレサセ玉
フニ三種ノ別アリイハユル甲冑ノ御姿ニテ馬
ノ御東帶ニテ立セ玉フト或ハ御躰ニ座

カハレマスト次ニハ僧形ニテ錫杖ヲ持紅蓮花
ノ上ニ坐シ玉フトノ三十リ、男山ニ鎮坐マシマス
大菩薩ノ御像ハレモ僧形ニテカハレマス像ナリ
コレ行教和尚ノ感得ノ御像ナル一レ次ニハ御束
帶衣冠ニテ弓箭取持セ玉フハ應神天皇ノ御在世
ノ御姿ヲ摸レ奉ル御神像ナル一レ甲冑ニテカハ
レマスヲモ天皇ノ御像トハ世ニハ甲タメレトモ
コハイカバ侍ラン或人ハハ幡太郎殿ノ御像ナラ
ン所考ヘテ云ルト有トオホエレカイカナラニ

年頃思に疑に侍りし。この頃田澤仲舒至ノ系圖
ノ卷ヲ見タルニテ、イサ、カ思ヒコレトコソ、ア
ナレ、厨川ハ幡ト云ハ、貞任ノ靈魂ヲ慰シ、眞福ヲ吊
ハシタメニ、ハ幡太郎義家朝臣ノ勸請シ玉フ所ニ
シテ、祭神ハ即安倍貞任至ノ靈ヲ祀ルト云リ、カク
テ思フニ、世ニ傳フル所ノハ幡ノ御神像馬上ニテ
弓箭持セ玉フナルハ、コノ貞任ノ靈ヲ祀リ玉ヘル
神像ハ、アケシカ、ソハカノ衣ノ袖ノ秀句ニ玉ヘ
テ、由ニテト聞ユレハ、其姿ヲ直ニ御神像トハナ

奉リタラシニテモ有レシモ、天カ下ニ冠ト
アリ、敬トアル人ノ靈ヲ祀リテ、社ヲ建テ齋フコト、
昔ヨリ多ク事ニテ、フノ人ノ靈魂ヲ慰シ、眞福ヲ修
ムルニ就テハ、神靈モ和モ玉フカラニ、國ノ身トモ
ナリ玉フ例アレハナリ、早良親王、伊登内親王、橘逸
勢、廣嗣ナトノ靈ヲ、御靈社ニ祀ヒ、相馬將軍ノ靈ヲ、
東國ノ處ニ、祠ヲ建テ祀ル類ニ、皆同レトナリ、扱
マタ貞任ノ靈ヲシモ、ハ幡ト申スヨレハ、祀リ玉フ
至ノ名ヲ直ニ祀リタル御社ノカタニカケテ、呼集

ワルニモアルハ、厨川ハ幡ノ御車、珍ラレク覺エ侍リレカラニ、因ニ御神像ノトニ考ヘ及ホスノミ、カクイフハ、淺草福井ノ町ナル銀杏ノ社ノ同シ大菩薩ノ大宮ニツカヘ奉ル、何某ノソミカク夕時ニ

文政ノ十一年二月九日ニナレアリケルトコシ、一ニ國ヲ守リテ、梓弓ハ幡ノ神ノミイワカレコシ止、凡テ人ノ靈ヲ祭テハ幡ト云フ例多キナリ、陰徳太平記ニ丹波國鹿集則重カ靈ヲ新ハ幡トアガメ、米沢志ニ本庄平繁長カ靈ヲハ幡宮トアガメ、阿濃丹子ニ平氏ハ幡社ノトアリ、美濃國惠那郡岩村ニ武並ハ幡アリ、加藤次景廉ノ靈ヲ祀ルトイハレ、此類ナクイクラモアリ又ハレ又十訓抄ニ云、美家若

トモニ、大ナル矢ヲ射ルニ、フノ矢ニアタリタ、ルモノ必タフレフサスト云フナレ、四重ニカコメ、ル軍ヲカケヤブリテ、圍ノ中ヲ出テ、又中一入ル、度ハナリ、縮光ノ如ク、レラ、回ヲアハスル者ナレ、貞任コレヲ感シテ、ハ幡太郎ト名ツクトアリ、コノ説ニヨレハ、義家ヲハ幡太郎ト云レハ、貞任ノ名ツケナレニテ、貞任ヲ厨川ハ幡ト云ルハ、義家ノ名ツケシナリ、

宗任

朝野群載ニ云、三月二十九日、太政官符、伊豫國司、應安置使所歸降俘囚、安倍宗任、同正任、同真任、同家任、波彌良、増等五人、從類、叅拾貳人事、宗任從類二十人、大男八人、小男一人、真任從類大男一人、家任從類三人、大

一人小良增從類一人部領使正六位上行鎮守府權
軍監藤原朝臣則經從類三人右得正四位下行伊豫
守源朝臣賴義去月二十二日解狀偶謹檢案內歸降
之者先日注交名早經言上訖則被下給官符備件人
等可隨後仰者於陸奧玉作待裁下既無左右仍抽為
宗放俘囚首安倍賴時男五人隨身所參上也抑宗任
破衣河關之口去鳥海之楯籠兄貞任姬戶之楯相共
合戰然而貞任等被誅戮間被疵逃脫其後弃拋兵杖
合掌請降即跪陣前悔前忠正任被落衣河關逃小松

村之玄相具伯父僧良昭逃至出羽國守源朝臣齊賴
聞此由圍在所之間逃入狄地去年五月稱奉命於公
家所出來也真任合戰之間依右身病不與今度之軍
云、然而被落所、柵之由依無所遁身請降出來沙
彌良增俗名則任從最初戰之庭被追散之後為助身
命忽出家即以母為先合掌出來家任籠姬戶之柵為
兄芳合戰而貞任重任經清被誅殺之際交步兵之中
逃脫經一兩日之後束手露身出來軍中者正二位權
大納言兼宮內卿源朝臣經長宣奉勅件宗任等忽悔

舊惡己為降虜、權其情趣、何不矜憐、宜仰彼國黨類、相
共移任便、所永為皇民、支給衣糧者、國宜承知、依宣行
之路次之國、宜給食馬符到奉行、左中弁藤原朝臣泰
憲、右大史小槻宿禰孝信、康平七年三月廿九日、卜
リ、真任他書所見ナレ考フヘレ

平家物語劔卷ニ云、賴光ノ弟河内守賴信ノ嫡子伊
豫守賴義、與羽ニ下向レ、九箇年カ間戰ヒ、終ニ
軍ニ討勝負任ヲハ、頸ヲ取り、宗任ヲハ、虜ニ上洛ス
長九尺五寸、宗任ハ、遙ニ者ヲ、六尺四寸ソ有

ナル賴義ノ宿所ニ在ケルヲ、卿相雲客達、吾妻ノ夷
サエソハ、ヲカシク侍ラメ、イサ行テ笑ハシトテ、梅
花ヲ一枝手折テ、宗任是ハ、イカニト問ケレハ、宗任
取アヘス、我國ノ梅ノ花トハ、見タレトモ、大宮人
ハ、イカ、イフラント申タリケレハ、皆シラケテゾ
還リケル

扶桑略記ニ云、康平七年閏三月、伊豫守源賴義從陸
奥參洛、奉使節之後、全經十一箇年歸來、去年誅罰賊
安倍貞任之日、所權^履生口、同宗任正任等五人、各列率

其身於是右朝議、今日十九日賜官符、伴宗任等不令
 入京中、便故遣伊豫國、又去年前出羽守源齊賴所捕
 進、同黨類僧良昭、同遣太宰府、百鍊抄モ
同急ナリ
 古今著聞集ニ云、十二年ノ合戦ニ、貞任ハウタレニ
 ケリ、宗任ハ降人ニ成テ来ニケレバ、ユルシヲツカ
 ヒケリ、嫡男義家朝臣ノモトニ、朝夕祇候シケリ、或
 日義家朝臣、宗任一人具シテ、物ヘ行ケリ、主從共ニ
 將裝束ニテ、ウツボヲゾオヘリケル、廣キ野ヲ過ル
 足走ケリ、義家ウツボヨリ、カリマタツヌキ

左、狐ノ前ノ土ニタケニケリ、狐其箭ニフセガレ
 左、右ノ耳ノ間ヲスリサマニシリ、一射タリケレハ
 左、右ノ耳ノ間ヲスリサマニシリ、一射タリケレハ
 箭ハ狐ノ前ノ土ニタケニケリ、狐其箭ニフセガレ
 引アゲテ見ルニ、箭モタ、ヌニ死タルトイヒケレ
 バ、義家ミテ、臆シテ死タル也、殺サレトテ射ハアテ
 子、今イテ歸ヤシ、其時ハナツベレトイヒケリ、則箭
 ヲ取テ、マイラヒケレバ、ヤガテ宗任ニテ、ウツボニ
 ナ、セ玉ヒケリ、他ノ郎等是ヲ見テ、アブナクモオ

ハズル物カナ、降人ニ参タリ、氏本ノ意趣ハ残タル
ランモノヲ、服ヲソラシテ、矢ヲウ、スルヲ、アズナ
キナ也、オモヒキル害心モアラバ、イカバトブカタ
ブキケルサレ、氏家ハホトレド、神ニ通ジタル人
ナリケリ、宗任イカニモ思ヒヨルベクモナカリケ
レバ、タガヒニテ、身ヲマカセケルニヤ、或夜又宗任
ハカリヲ具シテ、女ノモト一行タリケリ、家フルク
成テ、築地クヅレ、門カタブケリ、車寄ノ妻戸ヲマケ
リ、其内ニテアヒタリケリ、宗任ハ中門ニ待キリ、五

月、闇ノ空、墨ヲカケタル如クニテ、雨ヲリ、神ナリテ、
オソロモキナ限ナレ、イカニモ事アラシズラント
思ヒタル所ニ、業ノ如ク、強盗數十人キホヒ来、ケ
リ、門ノ前ニヨリソバヒテ、アリ、火ヲトモシタル影
ヨリ見レバ、世人バカリナリ、宗任イカバハカテ、フ
ベキト思ヒタルニ、中門ノ下ヨリ、犬一足ハシリ出
テ、ホエケルヲ、宗任ナイサキヒキメテ、モテ射タリ
ケルニ、犬イテ、レテケイ、くトナキテハレルヲ、ヤガ
テ、同レサマニ、矢ヲギ、バヤニ射テケリ、其時、義家朝

臣誰候ツト問タリケレバ宗任トナリタリ、矢ツ
ギノハヤキコソ、ハシタナケレトイハレケリ、強盜
ドモ此詞ヲ聞テ、ハ幡殿ノオハシマレケルゾ、ア十
カナレトテ、ハフクニケウセニケルナリ、
百練抄ニ云、治暦三年、宗任等移遣太宰府、依有欲逃
歸本國之間也、

太平記ニ云、宗任ハ筑紫ハ被流タリケルカ、子孫繁
昌シテ今ニアリ、松浦黨トハ是ナリ、

作樂ニ才圖會ニ云、筑前大島、一名安倍島、在糟屋郡

本之西北二里許、昔安倍宗任流於此、右宗任宅地之
跡、

宗任三男一女アリ、一ハ實任、二ハ光任、三ハ重俊、鳥
海系圖ニヨルニ、實任ハ出羽ニ生レタリ、鳥海三郎
ト號リ、鳥海家ノ族祖ナリ、

保元物語ニ云、相模國ノ平太景義、同レク三郎景
親、ツツサキニス、シテ申ケルハ、ハ幡後三年ノ
合戦ニ出羽國金澤城ヲセメ玉ヒシ時、十六歳ニ
シテ軍ノマツサキカケ、鳥海三郎、左ノ眼ヲ雷

ノハチツケノイタニ射ツケラレ答ノ矢ヲ射返
レテソノカタキヲ取レ鎌倉ノ権五郎景政カ末
葉大庭平太景親トソ名ノツタルトアル鳥海三
郎ハコノ人ナル一ニ後三年軍記平家物語ニモ
同レ物語アレハ歌ノ名ヲイハス

諸國里人談ニ云鳥海山ノ権現ハ鳥海彌三郎ノ
靈ヲ祠ルトナリ高山ニレテ常ニ雪アリ六七月
ノ頃山頂ニ登ル寺社ナリタ、アヤシキ巖窟也
社ハ麓ニアリ

任漢三才圖會ニ云出羽鳥海山権現在鳥海山俗
傳云鳥海弥三郎靈祠也、有川鎌倉権五郎景政與
鳥海弥三郎戰被射右眼放答矢射殺歎後拔鐵到
此川洗眼云、此川有黃鱧魚一眼眇也、中畧義家
征伐武衛家衛時鎌倉権五郎景政生年十六合戰
所射右眼自康平五年三十年以後以之考則其射
者非鳥海弥三郎明矣ト云ルハ實任カ鳥海三郎
ト稱レテ知ガレ故ニカクハイヘルナリ、
先任ハ筑前續風土記ニヨルニ伊豫國ニ生レタリ、

嶋、太郎ト號^スリ、
 重俊ハ肥前國ニ生レタリ、松浦太郎ト號^スリ、松浦静
 山入道ノ語ラレシハ、宗任法師、肥前ニ来リ、渡邊源
 久カ女ヲ娶リ、松浦太郎重俊ヲ生ル、年家ニ仕ヘ、西
 光法師カ首ヲナリシモノ是ナリ、其子孫今ニ殘レ
 ルモノハ、深江石源太相智文助二人ナリ、皆松浦ノ
 家人ニテ、在團セリト、語ラレキ、サレド、不審^{イフカ}シク思
 フアリ、松浦家受領セサリレ時、松浦安大夫ト
 ハ、重俊ノ裔^{スエ}ニテ、安倍氏ナルヲ明ラケシ、徳

川軍攻記ニモ、松浦安大夫アリ

平治物語ニ云、信頼卿ヤガテ、六条川原ニシテ、敷
 皮ノ上ニ引スヘタレ、凡思ヒモキラス、アハレ重
 盛ハ、サバカリノ慈悲者ト聞ツルニ、ナドヤ、信頼
 フバ、甲クスキ玉ハ、ヌヤラントテ、起^{オキ}ヌ、臥^ヨヌサゲ
 キテ、モダヘツガレ玉ヘハ、松浦、太郎重俊、キリ手
 ニテ、アリレガ、太刀ノアテ、所モ、覺エ、子ハ、オサヘ
 テ、カキ首ニゾレテ、ケル、見グルシカリシ、有サマ
 ナリ

長門本平家物語ニ云左衛門入道西光八日ノ始
ヨリ根本與カノ者ナリケレハカマヘラカラメ
ニガスタトラ松浦太郎重俊ガ承リ方便ヲ付テ
ウカバヒケル程ニ西光院ノ御前ニテ人ノ事
ニアヒケルヲ聞テ人ノ上トモ思ハズ淺マシ
ト思ヒテアカラサマニ宿所ヲ出テ又御所ヘ参
リケルニ物ノ具シタル武士ニハ目モカケズス
スハヤニアエミケルヲサキニ待カケタル武士
中ノルハ八条ノ入道殿ヨリキト立寄玉ヘ申シ

合スヘキ事アリト仰ラレ候ト云ケレハ西光少
赤面シテニガ笑ヒレ公事ニ付テ申上ヘキ事候
ヤカテ悉ルヘシトイヒテアエミ過レトスルニ
ウレロニアリケル武士カハイヤウ入道テガ何
事ツカ君ニ申ベキ世ノ大事引出シテ我モ人モ
ワツラヒアリ物ナイハセソトテおフセテツサ
ツケテ武士十餘人カ中ニ追立テ行テハ条ニテ
カクト申入タリケレハ門ヨリ内ヘハ入ラレズ
則重俊ガ承テ事ノオコリヲ尋ラレケレハ始ハ

大キニアラフコトヲ我身ニアヤマタヌ申フ陳ジ
 ケレハ入道大キニ腹ヲ立テ乱形ニカケテ折テ
 タゲテ問ケレハアルトナリテ皆オキニケリ書
 セテ判セサセテ入道ニ奉ル入道見ツ見玉ヒテ
 西光トリテマイレトノ玉ヒケレハ重俊カ家ノ
 子郎等々空ニモツケズ地ニモツケズ中ニサゲ
 ラマイリタリ中畧入道尻キレハキナガラ西光
 ガツラヲヒタクトケテ檢非違使ノ下ルツメレ
 西光ノサウナク首キルナヨククサイナメト

宣ヒケレハ重俊カ郎等ツトヨリテ大ニモトヲ
 持テ七十五个度ノ考杖ヲ法ニ任テ加ヘテケリ
 心タケク西光思ヒケレド木ヨリ問フニセラレ
 タリケル上シモトノ身ニシミテ術ナカリケレ
 ハ聲ヲアケテサケヒケルトフルテ流布ノ平家
 物語ニハ入道宣ヒケルハシマツカ首サウナウ
 キルナ能ク亂問シテ事ノ子細ヲタツ子トヒ其
 後川原へ引出テ首ヲハ子ヨトゾ宣ヒケル松浦
 太島重俊承テ足手ヲハサヒサマクヒシライタメ

トフ西光モトヨリアラソヒ申サバリケル上、
 問ハキヒシカリケレバ、残キウコフ申ケレ、
 四五枚ニ記セラレテソノ後、口ウサカレ、
 五條西ノ朱在ニシテ、終ニキラレニケルナリ、
 義経記ニ云、辨慶思ヒケルハ、人ノ重寶ハ千ソロ
 へテモツゾ、奥州ノ秀衛ハ、名馬千疋ヨロヒ千リ
 ヤウモツ、松浦ノ大夫ハ、ヤナグロ千コシ、弓千張、
 カヤウニ、重寶ヲソロヘテモツトアリ、秀衛ハ宗
 任ノ外孫ナリ、松浦大夫ハ子ナリ、二人東西ニ在

ルソノ多財ナリシト、思ヒヤルベシ、
 觀迹問亮志ニ千厩ノ舊址アリトテ、
 見レハコノ頃ナリ、
 諺アリシニテ、虚言ニハアラサレナリ、
 女子ハ御館五郎基衛カ妻ナリ、
女子ノ排行、詳ナリ、
 ス、暫ク男子ノ末ニ
 記、基衛ハ清衛ノ子ナリ、
 清衛勅ヲ奉リテ、
 中尊寺ヲ建、
中加一乃末信基衛父ノ志ヲ継テ、
 毛越寺ヲ建、
 ノ子秀衛、又無量光院ヲ建、
 清衛ハ頼良ノ外孫、
 秀衛ハ宗任ノ外孫、
 ニテ共ニ吾家ニ因縁アレハ、
 因、
 託シワルナリ、
基衛ハ頼良ノ外曾孫、宗任ノ女婿

東鑑文治五年條云毛越寺華堂塔四十餘宇禪
 房五百餘宇也觀迹問老志云毛越寺址在毛越
 勅願所基衡建之酷極富麗正觀所帝天正元年癸
 酉為野火燒之後盡荒廢餘斑神叢祠班或作摩
 多羅社中藏雲慶作彌陀熊野
 像八龜往時三山神像也
 基衡建立之先金堂
 號圓隆寺鏤金銀繼紫檀赤木等盡萬寶交衆色觀
 問老志云圓隆寺址在嘉祥寺址北今荒廢九間
 四面石礎猶存外為地塘綠水悠悠金堂五階塔南
 大門六間八間三本佛安藥師丈六同十二神將雲
 區址共在其傍以玉講堂觀迹問老志云講堂
 慶作之佛菩薩像以玉藏胎藏界大日今已廢
 入眼車此時始例
 常行堂觀迹問老志云常行堂在班神祠二階惣
 下其堂荒廢舊地乃今柳坊舍是也

門鐘樓經藏等在之觀迹問老志云二階惣門鐘
 上足歲改九條關白家染御自筆被下額參議教長
 元天正卿書堂中色紙形也此本尊造立間基衡乞支度於
 佛師雲慶雲慶注出上中下之三品基衡令領狀中
 品運功於佛師所謂金百兩鷲羽百尻七間中徑
 水豹皮六十余枚安達絹千疋希婦細布二千端糠
 部駿馬五十疋白布三千端信夫毛地摺千端等也
 觀迹問老志云安達絹希婦細布信夫毛地摺共
 是奧州佳產古今人之所稱也後來其制絕而無見
 寺落緣也然或千疋或二千端惟多顯昭亦與基衡

○廿二 庚子

先後不多，美見之希，而得之少耶。若前以此外副山
 貢多傳于世，後不負而少人問乎，可疑。此外副山
 海珍物也。三箇年終功之程，上下向夫課賦山道海
 道之間，片時無絕。又稱別祿生美絹，積船三艘送之。
 慶佛師拈躍之餘，戲論云：雖喜悅無極，猶練絹大切
 也。使者奔歸，語此由。基衡悔驚，亦積練絹於三
 艘送道。訖如此次第，達鳥羽禪定法皇，啟聞令拜彼
 佛像御之處，更無比類，仍不可出洛外之由，被宣下。
 基衡聞心神失度，閉籠于持佛堂，七箇日夜，斷水漿
 祈請，愁申子細於九條，闕白之間，殿下令伺天氣給。

蒙勅許，遂奉安置之。次吉祥堂本佛者，奉摸洛陽補
 陀洛寺本尊。注：觀生身之由，有說語為嚴重靈像之
 間，更建立丈六觀音像，其內奉納件本佛也。觀迹問
 云：吉祥堂在去柳坊舍可百步。次千手堂木像，口
 往昔号金輪山吉祥寺，其荒廢，其址僅存。
 八部眾各鏤金銀也。觀迹問：志云：法華堂藏千
 手像二十八部眾，慈覺作，今已
 亡。鎮守者惣社金峯山奉崇東西也。觀迹問：志云：鎮守社今已
 荒廢。次嘉勝寺，入滅，仍秀衛造之畢。基衡四壁并三面扉
 彩畫法華經十八品大意，本佛者藥師丈六也。觀迹
 志云：嘉祥寺址是亦荒廢。其次觀自在王院，法号
 址在弥陀堂南，恩綠淨而為池塘。

施基衛妻注宗建立也。四壁圖繪洛陽靈地名所佛

壇者銀也。高欄者磨金也。觀迹問志云觀自在

磨舊地在圓隆寺址。次小阿彌陀堂同人建立也障

東北其址為池塘。觀迹問志云

子色紙形參議教長卿所染筆也。觀迹問志云

妻所建毛越村中坂上。觀迹問志云

一節堂是往昔之址也。觀迹問志云

東鑑既漏嘉祿二年條云十一月八日己未陸奧

國平泉圖按舊謀隆寺燒亡于時有此災之由告廻

鎌倉中者有之可謂不思議云云然後日所令風聞

彼時刻也是藤原清衡建立精舍也靈場於莊嚴者

吾朝無雙云云右大將文治五年奧州征伐之次令

順禮給之後殆有信仰云云

東鑑文治五年條云一無量光院注号新事秀衛

建立之其堂内四壁扉圖繪觀經大意加之秀衛自

圖繪狩獵之鮓佛者阿彌陀丈六也。觀迹問志云

在高館東南曰之新御堂今盡荒廢舊礎猶存在時

大日像今移之中尊寺又云中尊寺大日堂在光堂

南堂中所藏多佛像是乃往昔所置于新御堂之大

日俗呼曰生慶大日木佛肌膚温如生人雲慶作

也往昔遇兵變其焦痕在有矣款迦退慶三重寶

作文殊普賢雲慶作千手觀音俗工也。觀迹問志云

塔院内莊嚴悉以所換字治平等院也。觀迹問志云

塔址是赤荒廢。一鎮守軍中央惣社東方曰吉白山兩社。南方祇園社王子諸社西方北野天神金峯山北方今熊野稻荷等社也。悉以模本社之儀。一年中恒例法會事二月常樂會三月千部會一切經會四月舍利會六月新熊野會祇園會八月放生會九月仁王會講讀師請僧或三十人或百人或千人舞人三十六人樂人三十六人也。一兩寺一年中問答講事長曰延命講。彌陀講。月次問答講。正五九月寂勝十講等也。一館事。注秀金色堂正方。並于無量光

院之北構宿館。號平泉館。觀迹問志云平泉館址在平泉村中新御堂西

高館南今廢。西木戶有嫡子國衛家。同四男隆衛宅。

相並之。觀迹問志云錦戶館址吉祥寺址三男

忠衛家者。在于泉屋之東。無量光院東門構一郭。號

加羅樂。按嘉樂館之誤。觀迹問志云嘉樂館址

居也。祖父清衛舊居江利郡餅田鄉。豐田堀河。帝康

和中。迂此地。往時乘神河。流迺長部山下。道路在河

東。架長橋而乘往。後來流于西。一高屋事。觀自在

王院南大門南北路。於東西及數十町。造並宿倉町。亦建數十字高屋。同院西南北。有數十字車宿。口夕

云廿三日庚辰於平泉巡禮秀衡建立無量光院給
 是摸宇治平寺院地形之所也豐前介為掌內者候
 御供申云清衡繼父武貞注荒河太郎鎮守府將軍武則系卒去後傳
 領奧六郡注伊澤加賀江刺去康保年中移江刺郡
 豐田館於岩井郡平泉為宿館歷世三年卒而兩國
注陸奥有一萬余之村建伽藍寄附佛性灯油其基
 出羽衡者果福軼父管領兩國又三十三年也復天七秀
 衡得父讓繼絕興廢蒙將軍宣旨以降官祿越父祖
 榮耀及子弟亦送三十年卒去己上三代九十九年

之間所造立之堂塔不知幾千萬字云觀迹問老
 康平元年戊戌後冷泉帝十三年其五年壬寅貞任
 伏誅然實俊云康保中遷平泉此義大与年數不相
 合今考康保元年甲子乃村上帝十八年至康平五
 年貞任伏誅九十九年至寬治五年武衡伏誅百九
 年豈夫然乎想夫記者誤康和字而為康保者也年
 号声音木相似矣以其出處考則清衡舊巨理權大
 夫絳清子而以康平四年卒七生安倍賴時外孫也
 明年壬寅賴時伏誅經清亦七保安三年壬寅六十
 一歲而卒蓋享國實三十二年言三十三年
 者奉其大數耳然則康保實誤康和字者也

家任

藤崎系圖二、八、鳥海彌三郎卜下、今八鳥海系圖
 從一、

正任

朝野群載ニ真任トアリハモシクハ此人ナランカ

サラハ真モ麻佐ト訓ムレ黒澤尻ノ尻ハ借字ニテ

後ヲ云坊後ヲ町尻ト云カ如シ正任ノ子頼嗣黒澤

五郎ト號リ黒澤家ノ族祖ナリ

中加一乃末陪

始亘理権大夫藤原経清ニ嫁テ清衡ヲ生ミ経清殺

サレテ後清原武貞ニ嫁テ家衡ヲ生リ寛治三年家

一衡七ヒテ清衡鎮守府將軍タリ俗ニハ後三年ノ戦

トイヘリ長治二年詔アリテ中尊寺ヲ經營シム

讀史餘論ニ云後三年ノ記ニ清衡ハ亘理権大夫

経清カ子ナリ経清誅セラレレ後其妻武貞ニソ

ヒテ家衡ヲ生ムサレハ清衡ト家衡トハ異父同

母兄弟ナリト云リ然ラハ真衡ト家衡ト同父兄

弟ニテ二人共ニ清衡トハ異父兄弟タル歟武衡

ガ事彼記ニ見エス思フニ是モ武則武貞カ子弟

タルヘシ王代一覽ニ武衡ハ家衡兄ノヲシ見エ

イカナル據ヤ覺束ナシ止トアリ本朝武家系

圖ニハ清衡カ母經清殺サレテ後清原武則ニ嫁
 シテ武衛家衡ヲ生ムト云リ武家評林五代一覽
 ニヨリタル説ナルニ
 觀迹聞老志ニ云中尊寺在中尊寺村號関山中尊
 寺堀河鳥羽兩朝勅願所也堀河帝長治二年乙酉
 奥羽押領使左少辨富任卿奉勅至東奥傳中尊毛
 越經營詔于御館清衡至鳥羽帝天仁年中稍落成
 焉以猶舍在衣関而號関山輪與富慶頗極其美今
 盡荒廢終存寺院

東鑑ニ云関山中尊寺事寺塔四十餘宇禪坊三百
 餘宇也清衡管領六郡之最初草創之先自白河関
 至于外濱廿餘箇日行程也其路一町別立笠率都
 婆其面圖繪金色阿弥陀像米澤志ニ云寛治五年
 奥州後三年合戦
 將軍武則子息家衡退治ノ時藤原清衡大功有之
 付テ鎮守府將軍ニ補セラシ奥州六郡ノ官領
 成ル其時先白河関外ノ濱ニテ廿日余ノ
 行程ナルニ其道一丁切石ノ笠率都婆ヲ立
 ル其石ノ面ニ金色ノ阿弥陀彫ル其後陸奥出
 羽一圓ニ押領ス鎮守府將軍藤原基衡又奥州ト
 出羽ト一圓ニ押領ス鎮守府將軍藤原基衡又奥州ト
 毛金色ノ阿弥陀彫ル其後陸奥出羽ト一圓ニ押領ス
 今此平都婆小菅ノ山上ヨリ東北ノ方村ニ備
 巡見スル屋代郷ニ至ルニテ五六石下リ其

外御城、外曲輪、西南、田畑、間街、佛訓、吉利、俱、如、有、之、石、高、十、五、六、尺、院、種、字、飛、佛、像、日、上、入、夕、
 是、之、梵、字、彫、入、了、何、某、日、佛、像、日、上、入、夕、
 京、本、長、寺、此、花、寺、一、高、進、何、其、石、終、後、
 方、有、題、目、塚、上、格、日、北、白、川、一、行、所、
 立、有、之、無、相、違、梵、字、彫、入、有、之、通、行、人、見、玉、
 今、略、稱、塔、也、又、梵、云、覽、云、蘇、偷、婆、此、云、塔、婆、此、云、高、頭、
 波、此、云、墳、又、云、撒、拜、婆、此、云、讚、護、或、云、浮、圖、此、云、聚、
 相、計、當、國、中、心、於、山、頂、上、立、一、墓、塔、又、寺、院、中、央、有、
 多、寶、寺、安、置、釋、迦、多、寶、於、左、右、其、中、間、開、闔、路、為、旅、
 人、往、還、之、道、次、釋、迦、堂、安、一、百、余、體、金、容、即、釋、迦、像、
 也、次、西、界、堂、兩、部、諸、尊、皆、為、木、像、皆、金、色、也、次、二、階、

函碯文庫

大堂、高、五、丈、本、尊、三、丈、金、色、彌、陀、像、脇、立、九、軀、同、丈、
 六、也、觀、迹、開、老、志、云、釋、迦、堂、西、界、堂、次、金、色、堂、上、
 下、四、壁、內、壁、內、殿、皆、金、色、也、堂、內、攝、三、壇、悉、螺、鈿、也、
 阿、彌、陀、三、尊、二、天、六、地、藏、定、朝、造、之、觀、迹、開、老、志、
 今、土、人、所、謂、光、堂、者、是、也、在、經、堂、東、南、堂、柱、各、因、胎、
 藏、界、大、日、十、二、軀、彫、螺、鈿、細、紋、堂、內、盡、金、色、中、攝、三、
 壇、各、上、置、佛、像、壇、下、皆、三、代、之、屍、也、左、壇、乃、瘞、基、衡、
 右、瘞、秀、衡、前、壇、清、衡、也、後、水、尾、帝、寬、永、中、黃、門、君、時、
 修、補、之、次、令、人、各、而、點、檢、焉、清、衡、櫃、長、六、尺、廣、二、尺、
 瘞、之、以、白、綾、漆、其、上、納、雄、劍、一、口、并、鎮、守、府、將、軍、印、
 室、基、衡、裏、之、以、白、絹、朱、其、上、觀、白、衣、表、錦、袍、秀、衡、亦、
 同、之、藏、和、泉、三、帛、忠、衡、函、首、高、二、尺、表、一、尺、五、寸、黑、
 漆、壇、上、佛、像、中、立、者、彌、陀、是、乃、定、朝、所、作、觀、音、勢、至、
 相、並、于、其、前、多、門、持、國、兩、立、六、地、藏、擁、後、共、雲、慶、所、
 〇、七、庚、子

造也。今日暗与東史記合。他今所藏有藥師二區共丈
 六有。大日一。龍共。運慶。所作。外有。珠藏。一曰。秀衛。擊
 刀。長一尺六寸。廣一寸二分。二曰。用。太刀。誤。衛府。太
 刀。者。長一尺六寸。出。秀衛。棺中。三曰。義經。自。殺。刀。長
 九寸。鎮府。即。南方。崇。敬。日。吉。社。此。外。未。本。一。切。經。藏。
 五。分。鎮。府。即。南方。崇。敬。日。吉。社。此。外。未。本。一。切。經。藏。
 在。光。堂。以。北。日。吉。社。今。廢。此。外。未。本。一。切。經。藏。
 觀。迹。開。老。志。云。藏。在。光。堂。西。北。今。曰。之。經。堂。攝
 八。架。置。三。代。所。寄。附。一。切。經。也。藏。經。函。廣。七。寸。長。一
 尺。五。分。高。三。寸。五。分。黑。漆。螺。鈿。利。弗。阿。眼。曇。論。上。快
 之。八。字。于。蓋。上。不。詳。文。字。義。理。三。代。共。藏。一。切。經。一
 部。紺。紙。金。銀。泥。清。衡。紺。紙。金。泥。基。衡。宋。本。黃。紙。秀。衛
 寄。附。也。東。史。經。藏。一。庫。藏。宋。本。一。切。經。乃。此。本。也。堂
 中。所。藏。佛。像。多。文。殊。一。龍。長。二。尺。五。寸。駕。獅。子。其。右
 于。圓。王。把。樂。進。大。上。老。人。手。拂。子。立。其。後。左。善。哉。童
 子。捧。一。匝。從。佛。陀。婆。里。取。錫。杖。內。外。陣。莊。嚴。數。字。樓
 于。後。俱。雲。慶。作。最。精。彩。逼。真。林。

函荷文庫

閣不違注進凡清衡在世三十年之間自吾朝廷曆

園城東大興福寺至震旦天台山每寺供養千僧

古事談云園城寺ノ鐘ハ龍宮ノカ子ナリ昔時

眺分粟津ニ男アリ武粟津者也カ少ノ出雲國ニ下リ

シガ海ノワタル間大風俄ニ祭リ波船ニ入レカ

小童梶ヲ取テ出未タリ此男一人乘レトイフ一艘

カニトモ心ヲエ子ドイフマハニ乘移リタレバ

風浪タチマチヤミヌモトノ船ハコッ間龍宮ニ

トレメレサテ小船ハ海底ニ入ト思フ間龍宮ニ
 イタル龍宮ノ殿閣奇麗イフヘカラス龍王出ア
 ヒテカクテク從類多ク驚歎ノ少メニ七ヒタリ
 今日又害ヒラルヘシヨソテ迎フトコロナリ時
 ヤウヤク樓ニ昇リテ待トコロニテ大蛇許多
 ケガヒテ樓ニ昇リテ待トコロニテ大蛇許多

庚子

春屬ヲ率テ出来ルヲ向カセ
 中ニ射入レ舌根ヲ射切下ニ
 コリテ大蛇退歸ルノ間追ナ
 タリコ、何事トイフトモ願
 ヒニハ、冠者イフトモ願
 イマダ鐘ヲ鑄ズヨリテ一
 国ニクダルノアイダハカ
 王甚ヤスキトテ龍宮寺ニ
 ヲカレテ、堂ヲ建ツ、廣
 一、揚テ堂ヲ建ツ、廣
 ノ後、總ニ位ノ寺也、事
 府將、軍、浩、衡、破、金、千、兩、分、ヲ、寺、僧、持、ハ、ニ、千、人、ニ、苑、不、
 其、時、三、綱、某、五、十、人、ノ、分、ヲ、寺、僧、持、ハ、ニ、千、人、ニ、苑、不、
 廣、江、寺、ノ、法、師、ニ、釣、ト、コ、口、件、ノ、廣、江、寺、ハ、天、台、ノ、
 ウ、リ、又、園、城、寺、ニ、釣、ト、コ、口、件、ノ、廣、江、寺、ハ、天、台、ノ、
 末、寺、ナ、レ、バ、後、日、ニ、衆、徒、此、華、ヲ、漏、キ、テ、件、ノ、鐘、
 主、ノ、法、師、ヲ、擲、メ、日、ア、ラ、ズ、湖、ニ、入、ト、ゾ、止、鐘、ノ、
 臨入滅年、俄始修

函碕文庫

ハトコレクマレ、千僧供養ハ
 カナラヌ有シ、千僧供養ハ
 逆善、當千百箇日結願之時、無一病、而合掌唱佛號、
 如眠閉眼訖、

觀迹問老志ニ、中導寺供養ノ願文ヲ載タリ、云、
 敬白、奉建立供養鎮護國家大伽藍一區事、
 三間四面檜皮葺堂一字、在左右廊廿二間、

莊嚴

五彩切幡廿二流

三文村濃大幡二流

奉安置丈六皆金色釋迦三尊像各一體

右堂宇則芝柳藻井天蓋宝網嚴飾協意丹雘悅目

佛像則蓮眼菖唇紫磨金色脇士侍者次第圍繞

三重塔婆三基

莊嚴

金銅宝幢廿六旒

奉安置摩訶毘盧遮那如來三尊像各一體

釋迦牟尼如來三尊像各一體

藥師瑠璃光如來三尊像各一體

彌勒慈尊三尊像各一體

右本尊座前瑜伽壇上置八供養之鈴杵立八方色

之幡幢儀軌次第莫不兼備

二階瓦葺經藏一字

奉納金銀泥一切經一部

奉安置等身皆金色文殊師利尊像各一體

右經卷者金書銀字挾一行而交光紺紫玉軸合衆

宝而成卷□添蓮以安部帙琢螺鈿以鏤顯日文殊

像者憑三世覺母之名為一切經藏之主迴惠眼而

照見運智力以護持矣

二階鐘樓一字

懸廿鈞鐘一口

右一音所罩千界不限拔苦與樂善皆平等官軍夫
虜之死事古未幾多毛羽鱗介之受屠逼現無量精
鬼皆去他方之界朽骨猶為此土之塵每鐘聲之動
地令寃靈導淨刹矣

大門三字

築垣三面

反橋一道廿一間

斜橋一道十間

龍頭鶴首画舫二隻

左右樂器太鼓舞裝束廿八具

右築山以壇地形穿池以貯水脈草木樹林之成行
宮殿樓閣之中度廣樂之奏歌舞大亦之讚佛象雖
為微外之蠻貊可謂界內之佛土矣

千部法華經

千日持經者

右弟子運志多年書寫之僧侶同音一口轉讀之一
口充一部右盡千部聚政之響尚成雷千僧之聲定
達天矣

五百廿口題名僧

右揚口列十軸之題名盡五千餘卷之部帙安手捧
持開紐無煩以前善根吉趣偏奉為鎮護國家也所
以者何弟子者東夷之遠西也生逢聖代之無征戰
長屬明時之多仁恩蠻貊夷落為之少事虜陣戎庭
為之不虞當于此時弟子苟資祖考之餘業謬居侍

因之上頭出羽陸奧之土俗如從風草肅慎挹婁之
海蠻類向陽葵重拱寧息三十餘年然間時享歲貢
之勤職業無失羽毛齒革之贄參期無違因茲乾憐
頻降遠優奉國之節天恩無改已過杖鄉之齡雖知
運命之在天爭忘忠貞之報國憶其報謝不如修善
是以調貢職之美餘拋財幣之涓露以吉土而建堂
塔治真金而顯佛經經藏鐘樓大門大楹依高築山
就窪穿池龍虎協宜即是四神具足地也蠻夷歸善
豈非諸佛摩頂之場乎又設萬燈會供十方尊薰修

白川院

崇徳院

鳥羽院

待賢門院

定遍法界素意益成悉地捧其金分奉祈
禪定法皇蓬萊殿上日月之影鎮遠功德林中霧露
之氣長齋

金輪聖王玉宸無動

太上天皇宝筭無限

國母仙院麻姑比齡林盧桂陽松子伴影三公九卿

武職文官五畿七道萬姓兆民皆樂治世各誇長生

為御願寺長祈國家區々之誠天高聽卑

綸緯依諸供養遂思寶曆三年青陽三月曜宿相應

支干皆吉延屬一千五百餘口僧讚揚八萬廿二一
切經金銀和光照弟子之中誠佛經合力添
法皇之上壽乃至鐵圍沙界胎卵涅化善根所罩勝
利無量敬白

天治三年三月廿四日弟子正六位上藤原清衡敬白

トアリテソノ次下ニ件願文者右京大夫敦光朝

臣草之中納言朝隆卿書之而有不慮之事及紛失

之義為擬正文忽染蔗毫耳鎮守大將軍花押ト了

リ此ハ清衡カ願文ノ本書紛失ニヨリテ顯家卿

一通ヲ寫シテ此寺ニ納メテレリ觀迹問老
志又云天治三年乃崇徳帝大治元年丙午也蓋
改元當在三月之後也故及于此乎竇曆年號考之
無所見蓋指天治三年是亦祝賀之詞而猶言鳳曆
堯曆者乎敦光乃藤原宇合之後式家儒明衡子敦
基弟而一世之學者也朝隆未詳想當時能書之人
大將軍乃奥州國司北畠中納言源顯家卿所書今
収之寺院トアリテ同書ニ顯家卿願文トアルハ
誤ナリ端書ニ延元秉北之歲小春下元之日書ト

アルハ後醍醐帝重祚延元元年十月十五日ニ顯
家卿ノ書レリナリ

則任

日本史列女傳ニミ則任妻アリテ今昔物語為貞任
妻者誤トアルハ竇ニサルナリ龍穩院系圖ニ則
任妻云々懐三歳嬰兒自投深淵死則任視之大怒自
觸岩石打碎頭而死國人祀其神白鳥有神トアル
ハ傳聞ノ誤ナリ觀迹問老志云白鳥古館在白
鳥村安部頼時弟八子白鳥八郎
則任居館也天正中
岩淵伊賀守者居之

高星

龍穩院系圖云、安東太郎三歲時、乳母懷而逃津輕藤崎、後為藤崎城主、大治三戊申五月八日卒、壽七十、二贈號高星山龍德院殿大虛高星大禪定門、後漢書云、何者明公既西、則邯鄲城民不捐父母、背城立而千里送公、其離散亡逃可必也、トアリ、城主ト云、字始見エタリ、

堯恒

藩翰譜云、其子堯恒、又安東太郎ト名ノリテ、藤崎住シ、コレヨリコノ家ノ嫡流ハ、皆安東太郎ヲ以

テ字トス、コレ先祖安東ヲ子孫ノ字トスル處ナリト云リ、サレバ安東太郎ノ號、此時ヨリ始メアラズ、龍穩院系圖云、久安元乙丑年二月廿日卒、贈號瑞源寺殿雄嶽堯恒大禪定門、

堯任

龍穩院系圖云、長寛二甲申年十月廿八日卒、贈號東源寺殿雄山堯英大禪定門、

貞秀

藩翰譜云、合考ノ説ニ、堯恒カ末安東太郎貞秀カ

時ニ後鳥羽院ノ御宇建久ノ頃高麗國ヨリ鷲羽多
ク献リシトアリ貞秀勇士ノ譽アルニ因テ内裏ニ
召レ彼羽ニ枚槍扇ニノセテ下レ玉フ弓矢トル身
ノ面曰何事カコレニシカレ長ク子孫ニ傳ヘ我家
ノ龜鑑トナスヘレテ獅子ニ牡丹ノ幕ノ紋ヲ改
メテ槍扇ニ鷲羽ヲツケニケル止龍穩院系圖ニ云
建久五甲寅年三月十三日卒壽五十八贈號龍興寺
殿大雲貞秀大禪門但シ安東九郎トアルハ不審シ
キトナリ新羅記頭書ニ云人五八十二代後鳥羽院

之御宇建久三年貞秀参内之時改安日姓為安倍
下國安東太郎安倍貞秀曰下將軍外濱殿也トナリ
サレ后此時氏ヲ改メテ安倍ト為レニアラサル下
ハ上ニ出タリ下國安東太郎ト云ミ誤レリ此頃
イマタ下國ノ稱號ハナキトナリ

安東二郎

東鑑ニハ安藤次トアリ

安東四郎

東鑑ニハ安藤四郎トナリ安藤ハ安東ト同シ近世

ハ多ク通ハレテ用_レ来_レリ

亮秀

龍穩院系圖ニ云、為平義時代官、守護東夷、任津輕、建保六、戊寅年二月廿三日卒、贈號東福寺殿、虛山秀空、大禪定門。

安秀

龍穩院系圖ニ云、建長四壬子年三月十五日卒、壽五十七、贈號東海山護國寺殿、萬安秀徹、大禪定門。

成秀

龍穩院系圖ニ云、寛元四丙午年九月二日、蘭山秀香、大禪定門、成秀ノ子、五郎三郎ト號_レリ、愛秀政秀ト、戦_レヒ歿_レ又、五郎三郎ノ子、安倍五郎ト云、田畑喜左衛門、敬_テ曰ク、安倍五郎ノ子、五郎九信濃ニ住リ、安藤久世、井上安倍等皆コレヨリ出タリト云リ、又云、三州桑子村妙満寺勢州一心田末寺院家ハ、安藤薩摩守念信坊開基ニテ、系圖アリト云リ。

政秀

龍穩院系圖ニ云、元應二庚申年十一月十九日卒、贈

辨寶光寺殿大榮徹大禪定門止十三湊。築キレハ
 コノ人ナリ、十三湊トサノミナト、訓リ、夫木欽ニ
 ク舟ノクルレモノハ心ナリケリト、古ハ東
 西ノ字ヲ用ヒタルニヤ、今昔物語ニ云、今ハ昔藤原
 信通朝臣ト云人アル頃、風イト恐口レク吹ラ、ア
 ハル年四月ハカリノ頃、死人打ヨセラ、埋コレ、夕
 ヲル夜東西濱トイフ處ニ、死人打ヨセラ、埋コレ、夕
 人ノ長五丈アリ、カキ馬ニ乗テ、打ヨセラ、埋コレ、夕
 リケル見ルカキ馬ニ乗テ、打ヨセラ、埋コレ、夕
 未弭、バ、見ルカキ馬ニ乗テ、打ヨセラ、埋コレ、夕
 べシ、其死人頭ヨリキレテ、右ノ年、左ノ足モナ
 シ、鷲トドノクニナリタルニ、右ノ女ト見エタリ、又
 右ニシカバ、ナツ大キニ、右ケル、女ト見エタリ、又
 陸奥國ノ海道トイフ所ニ、住ケル、國司モ、此大人寄
 タリト聞テ、人ヲツカレハ、テ見セケレハ、ソノ者カ
 一リヲカクト、カクリシニ、智アル僧ノイヒケル、

此一世界ニ、カ、ル大人アリトハ、佛モ説玉ハ、
 レラ思フニ、阿修羅女トニ、ラヤ、右テレトリ、申ケ
 ル、止十三湊、東西
 湊、同所ナルハ、

愛秀

藩翰譜ニ云、花園院ノ御時、正和ノ頃、貞秀カ後、安藤
 太郎亮勢、相模入道ノ時ニ、叛ク、高時諸國ノ軍勢ヲ
 催レ、コレヲウツ、楠判官正成ニ、催促ノ隨ヒテ、馳迎
 レ、十ト臣申スナリ、トアル亮勢ハ、愛秀ノ誤ナリ、北
 條九代記ニ云、高時カ管領、長崎入道圓喜、エテニ老
 耄ノ氣アルニ、依テ、子息新左衛門高資ニ、管領ヲ讓

リテ、隱居シケリ、高資大ニ奢テ、極メ、國家ノ政道ヲ
 雅意ニ任セ、萬民ノ愁憂ヲ思ヒ、ハカラス、重欲無道
 ナルヲモツテ、諸將諸侍、恨ヲ含ミ、憤ヲイダシ、其逆
 威ヲ振フテ、曰サマレク思ハヌ人ハナシ、爰ニ前
 代義時ノ世ニ、奥州津輕ニ居置レシ、安藤八郎カ末
 葉ニ、五郎三郎某ト、同名又太郎トイフ、ハ後父昆弟
 ニテ、門族ヲ相續シ、鎌倉ノ命ヲ守リケル所、領地
 ニ付テ、境目ヲ論シ、互ニ怒リテ起シ、甲不和ニナリ
 ケレハ、双方是ヲ鎌倉ニ訴ヘ、長崎新左衛門尉ニ、謁

フ入テ、下知ヲ待テ、所ニ、高資過分ノ財寶ヲ、双方ヨリ
 取ケレハ、コレニヨツテ、理非ノ決断、サラニ日ヲカ
 ケ子月ヲ越タリ、カノ兩人中、退屈シテ、訴論ヲ捨
 テ、津輕ニ飯リ、一味與黨ノ溢者ヲ招キ集メ、兩家相
 別レテ、軍ニ及ヒ、關ハ州ノ騷動トナル、高時聞テ、使
 ラツカハシ、双方ヲ宥メラル、ニ、ソノ令命ヲモ用
 井ス、終ニ、五郎三郎ハ討レタリ、即從家人等ハ、故
 ニナル、又太郎助清、年来ノ木望ハ遂タリケレ、且鎌
 倉ノ仰セヨソムケル上ハ、行末然ルヘカラス、又

イカサマニミ子細アルべレト聞エケレハ又太郎
 思ヒケルヤウ鎌倉ヨリ討手ヲ下サレ手籠ニナリ
 死シヨリハ運ニマカセテ世中ヲ騒ガシ重欲不
 道ノ長崎高資ニ年比ノ恨ヒテ敬レテ死バヤト思
 ヒケレハ一味同心ノトモカラテ語ラフニ鎌倉ニ
 恨アル者我モくと馳集マリ七八百人ニナリレカ
 ハ我館ニ要害ヲカマヘ近郷ノ土民百姓等が貯
 置タル米穀ヲ奪ヒ捕テ館ニ運ヒ入ケレハ兵糧ハ
 卓敬ナリ要害ハ嚴レカリケリ鎌倉ヨリ討手ヲ下

シテ責ラルレト寄手ノ軍勢ノミ多クセビテ仕出
 シタルヲミナク退屈シテソ覺エケル城中ノ強キ
 ヲ見テ山林嘯聚ノ惡黨モ四方ヨリ来リテ寄手ノ
 陳ニ夜討ヲイタシ打立追拂ヒケルホトニ鎌倉へ
 使ヲツカハシ加勢ヲ請ケレト高資ハ何程ノ事カ
 有ヘキトテ取合ズコレゾ天地ノ命ヲ革ムヘキ危
 機ノ始ナル北條家ノ元祖義時ノ世ヨリ數代相續
 レテ四海八方鎌倉ノ下知ヲ守リテ忠義ヲコソ存
 レケレソムク者ハナカリレニ長崎高資ガ政道邪

ナル故ニ武威夕々々ニ輕クナリケル驗ナリト
古光深慮ノ諸將諸士ハ歎キ思フモ多クナリケリ止
龍穩院系圖ニ云文和三甲午年三月五日卒贈躰安
日山太湊寺殿本覺玄秀大禪定門トスル文和三年
ハ正平九年ニ直スル南朝ノ御軍ニ從ヒタル者
ノ北朝ノ年號ヲ用フベキ様ナレド、ニ文和三年
トアルハ後ヨリ記シタルモノナレバナリ下ニモ
コノ例アリミナ改ムベシ

堯勢

龍穩院系圖ニ云、曆應四年己年十月廿四日卒贈躰
圓通寺殿俊巖大曉大禪定門トアル曆應四年モ興
國三年ニ直スヘシ上ニ云ルカ如シ家譜ニ興勤王
之師從子新田義貞歿于越前トアリテ義貞ハ建武
四年ニ歿リ堯勢ハ興國三年ニ歿リタルハ義貞ノ
死ニ後ル、丁四年ナリ思フニ始義貞ニ從ヒテ勤
王ノ師ヲ興シ義貞歿リテ後越前ニテ戦歿シタル
モノナルベシ興國三年ノ事太平記二十六ノ卷ニ
アルヘシ然レモ其卷今亡タルハ愛秀ノ事業今考

フ一カヲズ、歎息ス一十事ナリ、太平記卷首ニ云、高
戰、義助ノ敗北、并ニ尊氏直義カ、一代ノ忠道ヲ記ス、
二十ニノ卷ナリ、然ルヲ後ニ武州入道無念ノ事ニ
思ヒテ、一天下ノ内ヲ尋求テ、是ヲ燒失ス、今二十ニ
ノ卷、題ニ不讀ト云、當代ニアル所ノ二十ニノ卷
ハ、二十三ヨリ集メ出シ
テ、二十ニト号ストナリ

安東二郎

安東二郎ノ子ヲ、藤崎四郎ト云リ、太平記笛吹峠軍
ノ條ニ、新田武藏守義宗ニ屬シ、兵ノ中ニ、藤崎四郎
アリ、コノ人ナルベシ、ソノ前、武藏野合戰ノ條ニ、新
田左兵衛義興ヲ、大将ニテ、其勢都合ニ萬餘騎、

ハ、鷹羽一文字トアル、鷹羽モ、一族ノ内ナル一ケ
レ、トコノ人ナリヤイナヤ、知ベカラズ、

貞季

龍穩院系圖ニ云、應安四年辛亥年二月二十六日卒、
壽五十六、贈辨補陀寺殿仁山貞壽大禪定門トアル
應安四年ハ、建徳二年ニ直スベシ、藩翰譜ニ云、堯勢
カ子、安東太郎貞季、陸奥ノ國司、北畠中納言顯家卿
ノ姫君ニソヒ、忝ラス、コレ貞季カ、無二人宮方ナリ
レ故トソ聞エケル、龍穩院系圖ニ云、御内室貞治三

甲辰九月十三日贈號靈源院殿梅嶺妙香大禪定尼
奧州團司北畠源中納言顯家卿女下子貞治三八
正平十八直入一

盛季

盛季子曰康季

新羅記云盛季之息男安東太康季朝臣文安三

年從秋之嶋雖渡入津輕不運而病死矣龍穩院系

圖云奧州十三湊日下將軍永享八年後花園院

依勅命再興若州羽賀寺此寺者行基菩薩草建村

上天皇御願寺也詳見于羽賀寺緣起若狹志云

賀村靈龜二年靈鳳飛來于此地事開元正天皇勅

僧行基使造寺於其地為勅願所故号鳳聚山羽賀

寺天曆元年地震山崩水漲沒堂字明年雲居寺僧

得觀音於泥中村上天皇再與為勅願所寄田建久

元年源賴朝建三層塔為新願所文和三年守護細

川清氏為新願寄田延文四年後光嚴帝造營伽藍

勅使大納言勸修寺經賴到于茲應永五年罹災一

色詮範假堂字永享七年陸奧國十三湊日下將

軍安信康季改造堂字今所存即此大永四年九月

後柏原帝賜綸旨令開觀音惟帳丹後守人見某為

勅使代文錄四年安倍實季修補堂字為新願所至

今寄資料寬永十年我少將忠勝公修補外門正

保二年再興鐘樓以上詳于錄起寺記也緣起一
軸者陽光贈太上皇諱誠仁所筆其跋文後陽成
帝震翰古緣起者伊豫法眼所書也寺藏天曆三年
天正六年大永四年給旨官女世呼長橋勾當侍

之奉書音蓮院門主尊傳法親王所筆之喜捨文及
武田信豐丹羽長秀羽柴勝俊京極高次忠高我君
教世山林田地高附文教章又云秋田實季墓在羽
賀村羽賀寺号城介陸奥國十三湊日下將軍安倍
康季八世適年号高乾院空嚴梁空生時信此寺遺
言大葬埋骨於茲止若狭志八酒井家ノ儒臣箱庭
正義ト云カ著セル書ニテ我女將ト
イヒ我君ト云ハ酒井家ノ云ルナリ

康季子曰義季稱安東太郎

新羅記云康季之息男義季寶德三年催糠部松
館之人數而館籠鼻和郡大浦郷之處享德二年被
攻南部之軍勢而生害又祖父盛季依逃去下國之
惣領家斷絶畢

義季有女無男養政季為子以女配之

新羅記云伊駒政季朝臣十三之湊盛季之舍弟

安東四郎道貞之息男潮瀉四郎重季之嫡男也十

三之湊破滅之節若冠而被生虜糠部之八戸而改

名號安東太政季知行曰名部繼家督而孺崎武田

若狭守信廣朝臣相原周防守政胤河野加賀右衛

門尉越智政通以計畧同三年八月廿八日從大畑

出船渡狄之嶋也同書頭書云伊駒政季朝臣者

茂別下國式部家政之舍兄也維正統秋田氏家督也

本之南條治部少輔季繼、穩內郡之館、時土甲斐守
季直、リ部之今泉刑部少輔季友、松前之守護、下國
山城守定季、相原周防守政胤、子保田之近藤、小四郎
左衛門尉季常、原口之國邊、大郎左衛門尉季澄、比
石之館主、畠山之末孫、厚谷右近將監重政、所、之
重鎮、雖然下之國之守護、茂別、八郎式部太輔家政、
上之國之花澤之館主、堀崎修理大夫季繁、堅固守
城居、其時上之國守護信廣朝臣、為惣大將、射殺秋
之酋長胡奢魔、父子二人、斬殺、佑多利、依之、凶賊

悉敗北、其後式部太輔經中野路、山越來於上之國、
會若狹守修理大夫、有獻酬之禮、式部大輔家政者、
授刀、菊一於信廣、被賞勇功、又修理大夫者、授喬刀
來國、文字於信廣、此時信廣朝臣者、從若州、差來、包太刀、助
進於式部太輔也、

廉季

諸書、十鹿季、作、リ、夕、新羅記、ノ、廉季、ト、了
リ、理、ニ、於、テ、是、ニ、近、シ、今、ハ、廉季、リカ、
唱、ルカ、カ、カ、ノ、ス、エ、ト、誤、藩翰譜、云、實季、六代、ノ、祖、
リ、廉字、ヲ、填、ルル、カ、

安東太郎庶季應永ノ頃、初テ陸奥外濱ヨリ打テ出、
出羽國秋田、湊ヲ討從ヘ、自ラ秋田城介ト名、リ、其
子盛季、其子惟季、其子昭季、其子定季、代、字ハ安東
ト名定季男子三人アリ、兄ハ友季、弟ハ愛季ト名、
リ、實季ハ此愛季ガ男ナリケリトアルト、本朝武林
傳ニ傳曰、貞任宗任余族、適赴外濱、潛居、有其末裔庶
季者、應永年中、鎌倉持氏謀非望、於是關東又大亂、乘
其虛、庶季出於外濱、剽掠村里、領秋田港、改秋田太郎
城介トアルハ、二説トモニ、廉季ヲ以テ實季ノ祖ト

思ヘルニテ、誤ヲ傳ヘタルナリ、會津回家合考ニ云、
貞季ハ嫡男、安東太郎盛季カハ代ノ後、舜季カ子、愛
季ニ至リテ、出羽國秋田城ニウツリヌム、初貞季カ
二男、安東二郎庶季、出羽ノ秋田ヲ討テ、移リヌム、其
子孫九代ニシテ、絶ヌレハ、愛季秋田ヲ合セテ、領セ
ニナリ、凡此家ニ、湊ノ安東太郎、下國ノ安東太郎、兩
流アリ、湊後ニ下國ノ家ヲ合セシトハ、此輩ヲ申ス
ナリ、
廉季子曰成季、稱湊安東太郎、

本朝武林傳云鹿季有男子稱成季秋田太昂城介

成季子曰惟季稱湊安東太昂

新羅記云出羽國湯河湊之屋形秋田城介安曰

堯季者十三湊盛季之舍弟西關安東二昂廉季之

孫也故以一家之舊好湊堯季朝臣康正二年呼越

伊駒政季於小鹿嶋運籌策而取河北郡復安東家

矣十、一、八、上、二、一、八、力、如、以、誤本朝武林傳云

成季生惟季太昂城介

惟季子曰昭季稱湊安東太昂

本朝武林傳同

道貞

道貞子曰重季稱潮瀉四昂重季有二子一政季為秋

田家嗣二家政稱茂別八昂武部大輔家政子曰定季

稱下國山城守

新羅記云政季朝臣越秋田之小鹿嶋節中畧松

前者預同名山城守定季被副相原周乃守政亂

上

家季

龍穩院系圖云、田澤安東五帛、田澤家、元祖也、應永三十七甲辰年七月廿七日卒、贈號大虛玄信大禪定門。

出羽國風土記云、飽海郡田澤郷惣村高二千三十九石貳斗七合三勺、田澤村ノ内、并田ニラレノリ祭神知人ナレ、土人ラレメサマト稱ス、女體ニシテ、胡麻カラク持セ玉フトソ、氏子胡麻ヲマカズト云、三代實錄曰、伴部小掠賣者、出羽國飽海郡人也、仇

儀亡後、廬於墓側、為尼持戒、苦行精進、貞觀十五年夏六月、叙位二階、免同戶租、旌表門閭、止米澤志云、五味澤、八面野川ノモト、アツマ山ヨリ出テ、大樽川ト号ク、田澤川ヲハ、小樽川ト云、館野村ニ至テ、二川會シテ、面野川トナル、北流七八里、柄嶋村ニテ、松川ニ入ル、小樽川ハ、一名小樽川田澤村ノ山中ヨリ出テ、大荒澤ヨリ、立山村ニテ、オモノ川トナル、水清ク石奇麗ナリ、此邊ニ道途ニテ、小石ヲエテ、蓋石ニ用ユル、尤佳石ナリ。

義次

始小三郎後稱兵部寛永系譜、武藤ノ末ナリトア
ルハ誤テ實家ノ系圖ヲ引レタルナリ

常直

桃林寺碑陰記曰元龜二年辛未三月十二日自殺於
其地私謚曰真叟常心居士

國朝文庫

文政二年三月十二日二百五十回ノ遠忌ニアタ
レルヨリテ懷舊ノ連歌并ニ人ニヨリ贈レル
詩歌左ニ記ス

懷舊之連歌

わすれおのふ袖のまつくり春の夜	仲舒
まのよの朝のかりむゆふられ	恒徳
うらむほのねうら求あらまはれ	巖
ひさしくわく木風そくくあり	越代
えらぬく侍とら月やあぬらん	紅林

秋の地もをを、かつらうら
 おく、あは、尾花の末の、おあひま、
 恒徳
 波よ、ゆいふ、はの、と、ゆり、ふ、
 仲舒
 夕まの、まき、り、峰よ、まき、ん、て、
 巖
 ち、う、う、ほ、く、も、あ、つ、さ、わ、れ、れ、
 秋邦
 陰、廣、き、の、松、の、梢、は、あ、つ、も、り、
 仲舒
 友、ま、り、つ、れ、て、冬、あ、ま、敷、
 恒徳
 く、み、う、ま、に、あ、ま、け、や、あ、ま、ま、ま、
 秋邦
 一、お、ろ、ろ、り、の、え、ま、り、う、う、り、あ、
 巖

旅人ハ、あ、の、う、り、あ、の、あ、ま、え、う、
 恒徳
 海、名、の、月、も、さ、さ、ら、う、ま、い、あ、ま、
 仲舒
 初、り、の、雲、あ、ま、う、く、う、あ、り、て、
 巖
 う、あ、ま、の、ま、み、う、つ、ま、め、あ、れ、
 秋邦
 も、あ、ま、も、も、た、ま、く、る、の、あ、り、に、れ、
 仲舒
 巖、よ、う、ま、ん、ま、う、れ、や、ま、あ、と、
 恒徳
 う、あ、ま、あ、ま、り、ゆ、ま、ま、や、あ、ま、ま、
 秋邦
 移、り、く、山、田、ま、の、ま、り、あ、く、ま、
 巖
 業、ま、の、ま、り、の、ま、ま、ま、ま、ま、
 恒徳

二月

そよよきはれし、あまのささ衣

あまのさとあまの徳をいれ

わけし山海を、電ようも新

そよよき杖ついでと、い

病ふしきも新け新と後

いそりうあまの根のつもらん

あまの神のついでと、い

おのひわいしうまの徳のあま

あまのさとあまの徳をいれ

半野 巖

秋那

仲舒

恒徳

秋那

巖

恒徳

仲舒

あまの神のついでと、い

おのひわいしうまの徳のあま

あまのさとあまの徳をいれ

わけし山海を、電ようも新

そよよき杖ついでと、い

病ふしきも新け新と後

いそりうあまの根のつもらん

あまの神のついでと、い

巖

秋那

仲舒

恒徳

秋那

巖

恒徳

仲舒

つゞくもの所の山田とひらりしれ
秋邦
しれふきのひらりよ月の影とて
仲舒
くろりちりうよあつてちり酒
恒徳

仲舒十一 恒徳十一

巖十 越代一

秋邦十 事阿保一

己卯三月會田澤曩祖

越州公忌日

奈須恒徳

惟昔元龜二年事、莊内干戈日相尋、田澤城頭矢砲
急、紅塵散漫白日沈、爾來二百五十歲、胤孫如線繼
至今、雨露既濡春之暮、感時追遠淚盈襟、清酒一匏
香一炷、虔奉微馨
靈尚歆

春懷舊奉呈

田澤君祭奠

五十嵐安世

芳春濡雨露、君子思悽愴、追遠祭先后、舊里懷梓桑

梓桑田澤郡城古羽山莊往昔元龜宇兵戈絶紀綱
當時

祖侯烈勇居北方強創業能垂統世家奕葉昌
君守宗廟朝班列明堂載年暨國邑隔踰故悲傷思
沛漢高祖去邇周大王請見歸飛雁故國猶徊翔

春懷舊

義隆

おりのあつこゝぬきのまも思ふはて昔も思ひ
よりこの月氣

号儀

いさぎのさるを朽きいそまもかゝるぬれを傳はし

永年

土やふる軍の山よぬをそへて静けうそ昔のまは
流る

千川

ひささの昔のまのまさうはてんまよめぬりふの流る

恒疏

山嵐よりえはつとも楊花かゝるまき名えま代よ
あまき

善之

もれふの引もくまぬ梓弓まの田はる終る疎れら

中絶

諸君の御覧に候へば、此の如く、

其の如く、此の如く、

其の如く、此の如く、

其の如く、此の如く、

其の如く、此の如く、

其の如く、此の如く、

其の如く、此の如く、

大分

